The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	Todd M. Compton, Victim of the Muses : Poet as Scapegoat, Warrior and Hero in Greco-Roman and Indo-European Myth and History
Author(s)	平山, 晃司
Citation	西洋古典学研究. 2008, 56, p. 120-122
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/24872
rights	日本西洋古典学会
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

Classical Society of Japan

Todd M. Compton, *Victim of the Muses : Poet as Scapegoat, Warrior and Hero in Greco-Roman and Indo-European Myth and History* (Hellenic Studies 11). Pp. xvi+432, Harvard UP 2006. $29.95.

本書は，古代ギリシア・ローマの作家たちの生涯に関する様々な証言や記録を読み解き，それらの中にスケープゴート(パルマコス)の排除という共通のパターンを見出そうとするものである．いま敢えて「作家」という表現を用いたのは，著者 Compton(以下 C)が副題にある poet という語を広く言語による創作を行う人と定義しているからであるが，本書の考察の対象はさらに広く，著作を遺さなかったソークラテースや，神話・伝説上の人物にまで及んでいる．

第1部では，ギリシア文学史の登場人物たちが俎上に載せられる．ギリシアにおけるパルマコス儀礼とその起源説話，ならびに伝説中に見られるスケープゴート譚を概観した後(第1章)，C はパルマコスとの類同性が最も顕著に認められる人物としてアイソーポスを取り上げる(第2章)．一般にスケープゴート譚においては，主人公が所属する，あるいは異国からの来訪者として一時的に身を置いている共同体が疫病，飢饉，外敵の侵攻などの災厄に見舞われ，それを終熄させるため，主人公を殺害ないし追放して当該共同体から排除するという手段が講じられるが，『アイソーポス伝』に語られるエピソードの中で唯一この話型に適合すると認めうるのは，サモス島がリューディアー王クロイソスによる侵略の危機に晒されたとき，アイソーポスが自ら王の許に赴いて和平を取り付けたという話である．一方，この寓話作家の最期を描いたデルポイの段を一つの物語として見たとき，そこには終熄させるべき災いという要素が欠如している．C は，デルポイ人がアイソーポスを亡き者にしたのは，彼から奴隷の子孫呼ばわりされるという耐え難い侮辱を受けたことによって生じた 'plague of shame' の蔓延を防ぐためであったと言うが，これは首肯できない．アイソーポスが聖物窃取の濡れ衣を着せられながら，すぐには処刑されず，しばらく

NII-Electronic Library Service

Classical Society of Japan

の間牢獄に監禁されていることから，彼は災厄予防のための浄化儀礼に用いるパルマコスにされたと考えるのが妥当であろう．

第3章から第14章までは，以下の詩人たちのvitaを扱う：アルキロコス，ヒッポーナクス，ホメーロス，ヘーシオドス，イービュコス，アリーオーン，ステーシコロス，シモーニデース，サッポー，アルカイオス，テオグニス，テュルタイオス，アイスキュロス，エウリーピデース，アリストパネース．Cは，容貌の醜さや不具，身分の卑しさや貧困，殺害または追放される(あるいは自主的に国外へ退去する)，死後に英雄として祀られるといった，スケープゴート譚によく見られる諸要素のうち少なくともいくつかがそこに含まれていれば，それだけでその詩人をパルマコスと類同視しようとしており，しかもその議論には牽強付会が目立つ．たとえば，アルキロコスが祭儀の場でディオニューソスを讃える卑猥な歌を歌ったためにパロス島民の不興を買い，裁判にかけられたとの証言と，アテーナイではパルマコイが *σύμβακχοι* と呼ばれていたとの証言を結び付けたり，アルカイオスが追放の憂き目に遭った体験を歌った詩(fr. 130b Voigt)の中に己の境遇を表現したと思しき *λυκαιμίαις* という語が見えることと，狼のイメージを付与されたスケープゴート的な人物が文学作品中にしばしば現れることを関連づけようとする，といった具合である．たしかに，ヒッポーナクスやテュルタイオスのように，多少ともスケープゴート臭を漂わせている詩人もいないわけではない．しかし，何者かがヒッポーナクスを石打ちにするよう(市民らに？)命じたという詩人自身の言葉(fr. 37 West)は，彼がパルマコスにされかけたことを示唆しているかもしれないが，石打ちの標的となるのは必ずしもパルマコスではない．また，第2次メッセーニアー戦争の際，アテーナイ人を助言者として迎えよとの神託を得たラケダイモーンの求めに応じて，足萎えで頭の弱い読み書き教師のテュルタイオスが同国に送り出されたという伝説が形成される過程で，既存の何らかのスケープゴート譚が影響を与えた可能性は否定できぬとしても，この話をアテーナイ王コドロスの物語や，上述のアイソーポスがサモス島をリューディアーの侵攻から救った話などの類話と見なすことには，些か無理がある．

第15章でCは，プラトーン描くところのソークラテースはアイソーポスに擬えられており，さらにそこにはパルマコスの姿も重ね合わせられていると論ずる．第16章では，詩人たちのvitaが創出される際，枠組みの設定やテーマの選定において，マルシュアース，タミュリス，パーン，リノス，オルペウスといった楽人たちの神話が利用された可能性が指摘される．

NII-Electronic Library Service

Classical Society of Japan

第2部(第17-19章)では，ギリシアの事例を他の印欧語文化における類例と比較すべく，アイルランド，スカンディナヴィアおよびインドのpoet-heroたちが取り上げられる．彼らは戦士として勲功を立てる一方で，その痛烈な諷刺ゆえに社会から疎外され，同じ神から迫害と祝福を受ける．たしかに，ギリシアの詩人たちの中にはこのパターンに適合する者もいる．しかし，王の身代りとなって危険に身を晒す戦士はスケープゴートであり，戦士の有するそれと同質の攻撃性と狂気を備えた詩人もまた，その役を担うに適した存在であるというCの説(この点は，結論をなす第4部第27章においても重ねて強調される)は，容易には受け入れ難い．

第3部(第20-26章)はローマの文人たち(ナエウィウス，キケロー，オウィディウス，パエドルス，セネカ，ペトローニウス，ルーカーヌス，ユウェナーリス)を扱う．ここでは，「激しい毒舌や諷刺によって敵(殊に有力者)を辱め，時として死に至らしめたり亡命を余儀なくさせたりする(すなわち，Cの言によれば，相手をパルマコスたらしめる)力を持つ者は，ほかならぬその力ゆえに自らも同じ末路を辿ることになる」という，すでに繰り返し唱えられたテーゼの変奏曲が次々と奏でられるばかりであり，欠伸を禁じえない．

本書は，多岐に亘る資料を博捜し，入念に議論を積み重ねて築き上げられた労作ではあるが，スケープゴート(譚)の概念を恣意的に拡大したために，その核心において説得力を欠いたものとなっているのが残念である．とはいえ，パルマコスについて深く知りたい初学者にとっては，必要な資料や文献がほぼ網羅されているし，Lefkowitzの*The Lives of the Greek Poets*などを読んで詩人たちのvitaに関心を抱いた者や，Dumézilによって比較神話学に目を開かれた者にとっても，部分的には有益であると思われる．

平山晃司(京都大学)

NII-Electronic Library Service